

Title	「フランスにおけるマルクス主義の導入」をめぐるゼヴァエスとドマンジェ(一)
Sub Title	Sur "L'introduction du Marxisme en France" par A. Zévaès et M. Dommange (1)
Author	野地, 洋行
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1975
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.68, No.5 (1975. 5) ,p.478(66)- 486(74)
JaLC DOI	10.14991/001.19750501-0066
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19750501-0066">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19750501-0066</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 「フランスにおけるマルクス主義の導入」

をめぐるゼヴァエスとドマンジェ (一)

野 地 洋 行

「フランスにおけるマルクス主義の浸透についての、フランス語の専門書は1冊しかない。それはアレクサンドル・ゼヴァエスの1947年の本であり、20年以上たっている。この本の、十の章と付録とが有効にきり開いた領域は、これが他方で広く引用されているという事実によって証明されている。だが、時代がこれを過去のものとしたということのほかにも、この本はこの著者の他の著書と同じ欠陥、同じ誤りをもっている。その上、その成果は文献資料的にはほとんど、196頁の構成をもった、ただ1冊に支えられており、とりわけ、明らかになっていることはPOF (Parti Ouvrier Français フランス労働者党)の指導者たちを介して、第三共和国のもとのゲード派の強い影響を受けていることである」<sup>(1)</sup>

これは1969年にモーリス・ドマンジェがその著「フランスにおけるマルクス主義の導入」の序文で述べている言葉である。したがって、われわれがフランスにおけるマルクス主義成立というテーマを研究するさい、このゼヴァエスの、ドマンジェと殆ど同題の著書 (Alexandre Zévaès: Do l'Introduction du Marxisme en France. Marcel Rivière, 1947, Paris) の検討をもってはじめることは当をえたことであろう。上に引用したドマンジェの言葉からもうかがえるように、ゼヴァエスの著作には、多くの欠陥、問題点、不統一があり、そ

の点はしばしば研究者によって指摘されている。<sup>(2)</sup>そして彼自身がゲード派に属したことによって、歴史の評価や、マルクス主義なるものに対する解釈が一定の傾向をもつことも最初に頭に入れておかねばならないことである。だが、それにもかかわらず、この本が、資料的にきわめて豊かな源泉であり、高い価値をもつものであることはいぜん確認されるべきことである。

この著作は、フランス人からみたマルクスである。ジュール・ゲード Jules Guesde 自身がそうであったように、われわれはこの本から、フランス人がマルクス主義をうけ入れてゆく上での葛藤をよみとることができる。ブルードンやブランキが支配したフランス、革命の伝統の誇り高いフランス、革命の聖地、パリ人の誇り、社会主義の正統の伝説、そのフランス人が、ドイツ人マルクスの学説をうけ入れて行くその葛藤がそこからよみとれる。それが、この著作を、マルクス主義がフランスに浸透して行くまなましい過程そのものとして、生彩あるものとしているといえよう。著者のゼヴァエス自身もまたその洗礼をうけたものであろう。それは、異教徒の中に浸透していくキリスト教についての、改宗した異教徒の目での叙述ともいえよう。生まれた時から正統を前提としていた人間たちは、異教との戦いを知らないから、したがってそれがうけ入れられるさいに何を与えたか、あるいはその為は何を捨てさせたかについて知ることがない。

マルクスの思想形成の過程は、当然のことながら、マルクスの思想が、いかに各国の思想や運動の中に浸

注(1) Maurice Dommanget: L'Introduction du Marxisme en France, Edition Recontre, 1969, Lausanne, p. 11.

(2) たとえばボッティジェリはこういっている。(ラファルグの研究に関して)「もっともゆたかな資料源はゼヴァエスである。だが、同一の諸事実に対して彼がみとめる関係や、彼が述べる意見がどんなに変わってしまうかを知るにはその二つの著作『影法師とソルエット』(パリ, 1928年)と、『フランスにおけるマルクス主義の導入について』(パリ, 1947年)とを比べてみれば十分である。それゆえ彼の情報はきわめて注意を要する」Émile Bottigelli: Introduction pour "Friedrich Engels, Paul et Laura Lefargue, Correspondence," tome premier, 1956, Paris, p. XIV.

透していったか、とは、別の視点から考察されるべき問題である。だが、確立されたマルクスの思想体系をあらかじめ正統とみる立場は、マルクスの思想形成の過程をそのままマルクス主義の支配形成の過程、異教克服の過程とみなしやすい。そのようなみかたは、思想の浸透過程、諸思想の闘争過程を考察の外に置くことによって、その社会の現実性や個性、歴史的な性格、特殊性をも、同時に考察の外におくことになるであろう。

二

構成はつぎのようになっている。

第一章 マルクス主義への一瞥

マルクス以前の社会主義——弁証法的唯物論——史的唯物論——空想社会主義と科学的社会主義

第二章 フランスにおけるマルクス

1843年の最初の滞在——第2の滞在(1848-49)——1869年の秘密のパリ訪問——アルジャントウイユでのマルクス

第三章 〈哲学の貧困〉から〈資本論〉へ

マルクスとプルードン——〈共産党宣言〉——〈資本論〉のフランス語訳；出版と配本

第四章 マルクスとパリ・コムユース

インターナショナル幹事会宣言——コムユースただ一人のマルクス主義者、レオ・フランケル——ロンドンでのコムユース被追放者たち、そのマルクスとの関係

第五章 マルクス主義“独裁者”たち

パリでのヴァン・エドゥガム——トゥールーズでのダントレーニュ——トゥールーズの裁判——ジュラ連合へのジュール・ゲードの手紙——インターナショナル内での紛争

第六章 ジュール・ゲードのマルクス主義宣伝

カール・マルクス対ジュール・ゲード——そのフランス帰国——マルクスへのゲードの手紙——「平等」紙の刊行——マルセーユ大会の諸決議——ロンドンでのジュール・ゲード——フランス労働者党綱領の仕上げ——ルーベ大会の諸決議

第七章 マルクス主義の浸透に対する反動

連合派對マルクス主義——ボンビリスト對マルクス主義——ブノワ・マロンとガブリエル・ドゥヴィルの論争——フェリクス・ピア、プロト、

ジュール・ヴァレーの態度——ゲードとヴァレー

第八章 マルクス主義の勝利

ボンビリスト分派の解体——ラファルグとゲードの選挙——議会でのマルクス主義——プランキ主義とマルクス主義との結合——社会主義者統一の実現

第九章 修正主義の企て

ジョーレスと観念的史観——ポール・ラファルグの回答——革命的方法であってドグマではない

第十章 マルクスのフランス語訳

「共産党宣言」の最初の翻訳——「資本論」の要約——全集の翻訳

結 論

付 録

I フランスにおけるマルクス主義史の主要年表

II アムステルダムにおける国際社会主義会議の決議

III 文献

IV 引用された人名の索引

第一章は、マルクス主義に関する、古典的な、そしていささか通俗的な解説である。それはこの著者自身がゲード派の領袖であることと、この本が出版された1947年という時代を考えて読まれるべきものであろう。むしろこの要約ないし解説の中に、マルクス主義のゲード派的理解の図式をよみとるべきであろう。

第二章。若き、無名のマルクスが、パリに滞在した、ということでは、ない。マルクスを主人公にして歴史をみるばあい、この至極当然なことが死角に入りやすい。だがフランス人を主人公にしたばあいには、そういう錯覚はなくなる。フランス史の中に、“マルクス主義”が入ってくる時期は、マルクスが、フランスに住んだ時期とは別なものである。この章では、マルクスの四度に亘るフランス滞在が、まとめでのべられている。マルクスの生涯、その思想形成の過程が、フランスにおけるマルクス主義の普及過程でない以上、そうせざるをえないであろう。

第三章。マルクス主義がフランスに普及したのは、マルクスの著作によってではない、とはじめに著者はいう。この章のさいごではつぎのように述べられている。「したがって、直接フランス語で書かれたものであると、翻訳されたものであろうと——〈哲学の貧困〉や〈宣言〉や〈資本論〉が問題なのだが——マル

グスの学説が最初にフランスに浸透したのは、彼の著作によってではまったくない。」(p. 42) なぜなら、これらの諸著作は、フランス人の間に何の反応もよびおこさなかったからである。著者はこれら三つの著作の一つ一つについて述べている。「哲学の貧困」は1846年から1847年の冬にブリュッセルでかかれ、1847年にパリとブリュッセルで出版されたが、ブルドンに対する「マルクスの反論は注意をひくことなく終り、だれもそれに気をとめない。」(p. 35)

「宣言」。六月の労働者蜂起の少し前、「宣言」のフランス語版がパリで出版されたい。だが、この版の足跡を見出すことはまったくできない。だれもそれが何部出されたのかも知らない。はらきりしていることは、それがまもなく見出されなくなった、ということだけであり、Bibliothèque Nationale にもない。反動政府の弾圧が「宣言」を政治的に消し去っただけではない。著者はいつている。「ヴァンデルヴェルデがみとめたように、〈宣言〉はまず〈見落〉され、〈1871年までは、ほとんど、文献学的な好奇心しかひきおこすことがない〉」(p. 37)

「資本論」についてはどうだろうか。この部分は、最近、フランス語版が問題になることが多いだけに、やや忠実に紹介してみよう。資本論(第一巻)が出たのはいうまでもなく、1867年7月ロンドンにおいてである。「フランスにおいては公衆に非常に注目されるということとはなかったが、若干の学者の間で注意をひいた。オーギュスト・コントの学説の機関紙『実証哲学』は、それが形而上学的な政治経済学をつくりあげ、未来のための処方箋をつくりあげる代りに、批判的分析に甘んじている、というまことに奇妙な非難を与えている。」反対に、モリナリやモーリス・ブロックが主宰する“Journal des Economists”は、マルクスが分析的方法に頼ったとみて、つぎのようにつけ加える。「この著作によってマルクス氏は、もっとも卓越した分析的精神に仲間入りしている。」

資本論刊行のその年に、フランス語訳が考えられた。エリー・ルクリュとドイツ社会主義者モーゼス・ヘストがその任に当たるといってであったが、この計画は実現しない。マルクスはシャルル・ケラー Charles Keller なる人物を翻訳者としてみだし、彼は実際著作の最初の何章かを訳したが、1869年その仕事を中断する。ケラーとの交渉は二、三年の間つづいた。少なくともケラー訳の一部が印刷して廻されたが、ついでその校正刷りは破棄された。ケラーはインターナシヨ

ナルのメンバーであったが、1872年バクーニ派に属し、マルクスと対立している。このことが計画され、手をつけられた翻訳をかれが放棄した理由であろうか? とゼヴァエスは述べている。(p. 38)

1871年にマルクスは資本論の仏訳のための出版元をみいだす。これがモーリス・ラシャートルであり、「他方で、1872年1月、翻訳者が現れる。それがジョゼフ・ロワであり、マルクスの女婿シャルル・ロンゲによってマルクスに推薦された人物である。すでにロワはフォイエールバッハを翻訳しており、フランス語とドイツ語とを完全に自分のものにしていて。エンゲルスからヴィルヘルム・リープクネヒトにあてられた1872年2月15日付の手紙が、フランス語訳に関する契約に、ラシャートルとマルクスがともに署名したのはこの日付であることを示している。」(p. 38)

フランス語版への序言および後書によって、すでによく知られていることであるが、マルクスはロワのフランス語訳を初めから終りまでみなおし、修正を加えることを企てた。1872年5月28日、かれはダニエルソンに書いている。「フランス語版——フォイエールバッハの翻訳者ロワによってなされた——は二つの言葉を完全にものにした人物の仕事ではあるけれども、ロワはしばしば余りにも冗長に翻訳した。それゆえ、私はフランスの一般読者に近づきやすくするため、いくつかの章全体をフランス語でかき直さざるをえないことになった。」(p. 40)

こうしてエンゲルスとの間の手紙が示しているように、マルクスは大変な労力を自分に課す。フランス語版は、分冊の形式で出版されることになったが、1872年5月のはじめ、最初の3分冊の初校を印刷に送る。7月、2校。1872年8月に出版。同年11月、オックスフォードのロンゲ方に数日おもむき、いくつかの頁の翻訳について相談する。1873年6月から7月にかけて第7分冊の修正、そして病気の為、数ヵ月の中断があったが、最後の3分冊に至る迄、修正を加えた。1875年5月に出た第一巻の最終分冊は、マルクスの読者への助言をふくんでいた。

フランス語版序文として用いられている有名な1875年4月28日のラシャートルあての手紙のほかにも、著者ゼヴァエスは、いくつかの手紙をひいて、いかにマルクスがフランス語訳に力をそそいだかを論証している。1874年5月12日付ラシャートル宛の手紙の中で、マルクスはロワのテキストを最初から終りまで、手を入れなければならなかったことを示している。同年8

月4日の別の手紙の中で、かれはゾルゲに、フランス訳の修正は、実際には完全なかさかえに等しい、と書いている。1875年1月20日付、オッペンハイム宛の手紙では次のようにかかれていた。「私はフランス語訳の中に多くの変更を与え、そこに、特に最後の部分に、多くのことをつけ加えた。」(p. 41)

こうして資本論のフランス語版が世に出る。よく知られているように、それはマルクス自身によって、「原著から独立した学問的価値をもつものであり、ドイツ語に親しんでいる読者からさえ参照されるべきものである」(あとがき)と述べられたものであった。セヴァエスによれば、「最初の分冊は、ラシャートル宛、1872年3月18日付の手紙を序文の形で前に置き、1872年8月に出、1万部の印刷であった。」「翻訳の発行は3年の期間に亘ってつづく」だが、「それはほとんど世人に知られることなく終わった。」(p. 41)とセヴァエスは述べている。

分冊発行という苦心の形式も、世人は小説などによってすでに馴れており、何よりも1871年以来(パリ・コミューヌの年)、それを買いそうな社会主義者たちは追放され、抑圧され、ちりぢりになっていたからであり、フランスは「道徳的秩序の体制」の下にあったからである。編集者の側近の中にも、多分、警察と共謀して、発行を妨げようとつとめる人物さえいた。資本論を編集した書房でさえ、たまに現れる買手に分冊を売ることが拒まれた。それは25年以上あとに、POF (Parti Ouvrier Français) がマルクスの名をフランスに知らせはじめた時になって、はじめて売り切れたのであった。血のコミューヌの翌年のフランスでは、資本論は広く読まれることなく終わったのである。

### 三

第四章。それではマルクス主義がフランスに浸透したのはパリ・コミューヌの運動、またはそこでの人物によってだろうか。これがこの章のテーマである。

マルクスはフランスの労働者運動や革命的運動を特に注意して検討し研究していた。その成果には「フランスの階級闘争」と「ルイ・ボナパルトのブリュメール18日」がある。第2帝政の終り頃、彼は多くの闘士たちと文通していた。Lafargue, Serrailier, Varlin, Léo Frankel などがマルクスに、パリ労働者の行動や組織について情報を知らせていた。みずからも、1869年には内密にパリに1週間をすごし、つぶさに世情、政情

を観察し、普仏戦争を予見した。

1870年9月4日の革命の翌日以後、インターナショナルの幹事会宣言(9月9日付)——マルクスがすべて起草した——は、ドイツ社会主義労働者に、「フランスに名誉ある平和とフランス共和国の承認」を政府に要求するようよびかけ、他方ではフランス労働者に慎重さを求めた。よく知られたことだが、マルクスは条件が未成熟であるという理由でパリの蜂起に反対していたが、ひとたび蜂起が起きるやただちにこれを支持し、幾百通もの手紙をかいて支持を世界に求めたのであった。1871年5月13日、マルクスは二人のコミューヌ闘士、ヴァルランとフランケルに手紙を書いている。コミューヌは1週間の超人的な努力の後、5月28日息絶えた。5月30日にすでにマルクスは、インターナショナル幹事会会議で、宣言についての講演をしている。そこでかれはコミューヌの経験を分析し、これに次のような題をつけた。「1871年におけるフランスの内乱」。

セヴァエスはマルクスとパリ・コミューヌの一連のかかわりをこのように述べてからつぎのようにいう。「このようにマルクスが、かの大空へのきざしを試みたタイタンたちに、輝かしくも感動的な敬意を払ったとしても、また、このタイタンたちがその血をもってかき上げた叙事詩をマルクスがほめたたえたとしても、そのことは、マルクスが自分自身で、あるいはマルクス主義が、パリの革命に対して何らかの影響もっていたことになるだろうか。全然 そうではない。」(p. 49) コミューヌは12人ほどのブランキスト、それにブルードン主義者(ヴァルラン、ロンゲ、その他)、旧ジャコバン派の三月革命党员、その他様々な傾向の革命家たちからなり、その大多数はマルクスの名前さえ知らなかった。セヴァエスはいう。「市役所政府は、ただ1人のマルクス主義者を数えるのみである。マルクスとマルクス主義を知っている1人のマルクス主義者、それはレオ・フランケルである」と。

ハンガリヤ系のインターナショナルのメンバーであり、宝石職人であるレオ・フランケルは、パリ13区から市役所へ選出された。コミューヌはかれに〈労働・産業・交換〉委員会の委員を委嘱した。フランケルはマルクスに手紙をかいている。

「実現すべき社会改革についてのあなたの御意見は、私たちの委員会のメンバーにとってきわめて貴重なものとなりましょう」「もしあなたが、何らかの助言という形で私を援助する気になって下されば、私は大変嬉しいのです。それは、今のところ、私はいわばたっ

た1人ばっちで、私が国民労働部門にうけ入れさせたいと考えているすべての改革の責任を、自分1人の肩に背負い込んでいるからなのです。」マルクスはすぐに、さし当って可能な社会的方策を実施して、プロレタリアがコミュニューの運命に利害をもつようにすることをすすめた。フランケルはそのためのベストをつくした。だが、パリの労働者は、まだ職人、小生産者が中心となっていたので、マルクスのプロレタリアをひき入れるような改革を、という助言は、小生産者たちの反撥を買うおそれがあるためむつかしく、実を結ばない。労働委員会のプログラムは、今日読むとかなりばやけたものにみえる。それは行動と実現のプログラムではなく、むしろ研究と準備をよびかけるプログラムでしかない。マルクス主義を実現する条件が、コミュニューの中には、まだ、ない。ゼヴァエスは結論する。「コミュニューに対する、そのメンバーに対する、かれらの活動に対する、マルクスの影響はそれゆえ殆ど無である」(p. 52)と。

では、マルクスの影響は、コミュニューの闘士たちがロンドンへ亡命した後に生まれたであろうか。イギリスに逃れた多くの追放者の中、何人か(ブランキスト)は「ラ・コミュニュー」という秘密結社に集り、他の何人かはインターナショナルを通じてマルクスの名を知り、彼の役割を知って交友関係を結び、しばらくの間、彼をしばしば訪れさせた。だがこの関係はきわめて短く、追放され、亡命したパリ人たちに対し、マルクスはかなり厳しい評価を下している。1874年4月4日付エンゲルス宛の手紙でマルクスはかいている。「ハーグの大会で、私たちとともに、共有の大義をつくり上げた何人かのフランス人たちは、それ以来、ほとんどみなカナイユ(ルンペン)であることを示した。そしてとくにル・ムーシュ氏は……」(p. 53)。マルクス夫人も、エンゲルスも同様である。エンゲルスはゾルゲ宛の手紙でかいている。「すべてのフランス亡命者は気が顛倒してしまっている。かれらはお互いの間でも、みんなを相手にしても、まったく個人的な問題で、またしばしば金の問題で、いい争い合っている。私たちはいまや彼らに、ほとんどうんざりしきっている。戦争中、つぎにコミュニュー中、そして亡命中の怠惰な生活が、この人たちをすっかり駄目にしてしまった。」この判断はきびしすぎるが理由がないわけではない。事のなり行きで革命運動に投げ込まれた人々が、明確な思想と理論をもっていないのは否定できない事実なのだから、とゼヴァエスは述べている。

1880年の大赦までイギリスに亡命していたコミュニューのメンバーの中で、マルクスと友好的で変らぬ関係を保ったのはシャルル・ロンゲ——1873年にマルクスの長女と結婚した——と、エドゥアール・ヴァイヤン——イェナ大学でその学問を仕上げ、マルクス・エンゲルスがともにその百科辞典的知識と、その革命的感性を高く評価している——と、インターナショナルの古い闘士、アルベール・テースの3人だけであった。だが、フランスに帰国したのち、この3人のうちの誰も、固有の意味でのマルクス理論の宣伝に貢献したものはいなかったのである。ヴァイヤンは、1881年7月、ブランキの思想と伝統をついで「中央革命委員会」を組織したし、ロンゲは「正義」紙の編集者として、テースはロシュフォールの『Intransigeant』紙の編集者としてともに「共和社会主義同盟」の設立に参加した。この同盟はゲードやラファルグのPOFと、つまりフランス・マルクス主義者たちと論争を交えることになるだろう。「それゆえ、マルクス主義がフランスに浸透するのはコミュニューによってでもないし、その戦士や亡命者の仲介によってでもないし、かれらの多少とも熱心なマルクス訪問によってでもないのである」(p. 55)とゼヴァエスはこの章を結論づけるのである。

第5章。1872年9月2日から7日にかけてのインターナショナル、ハーグ大会の後、まだロンドンにおかれていた協会の幹事会は、フランスの状況把握に専念するとともに、そこでマルクス主義が強い抵抗にあっていることを認めた。ジュラ連合やブランキストが、フランスを擁護し、フランスで幹事会を代表するSerrailierは多くの地区から応答をうけとっていない。次の大会では多数派は向うへ行ってしまうだろうとエンゲルスは心配している。コミュニュー後の弾圧の為、インターナショナル組織は潰滅したが、リヨン、サンテチエンヌ、マルセーユには闘士が生き残った。だがそれはバクレーン派が多かったのである。

アメリカ合衆国へ移動したばかりの幹事会は、いぜんマルクスとその友人の手中にあったが、フランスで、その地方支部を組織し、マルクスの影響を浸透させるために、3人の代表を指名した。Van Heddeghem(別名Walter)をパリとパリ周辺地区へ、Dentraygues(別名Swarm)をラングドック地区へ、Laroqueをポルドー地区へ。

この3人のうち、ゾロックについては言うほどのことは何もない。彼は何もしなかったから。だが他の2

人については選択を誤っており、インターナショナル首脳部は2人について何も正確な情報をもっていなかったことが明らかとなった。第一の者はブランキスト的な若い学生であったが、1873年3月4日、セヌヌ県裁判所でインターナショナル加盟を禁じた法律違反のかどで起訴された。そのさい、彼は政府に対してまったく従順な態度を示したにもかかわらず、2年の投獄と、100フランの罰金、5年間のすべての公民権の停止を免れなかった。

Dentraygne は、当時インターナショナル運動が盛んであったトゥールーズで活動したが、警察の密告者ニスパイであったようである。当時トゥールーズでは闘士たちは「人民の眼」という会報をもち、デュポルタルの急進主義的新聞「解放」がその運動の普及を助けていた。だが加入者をふやすという口実で、Dentraygne は同志の名前を警察に知らせてしまった。このことが、1873年3月10日、トゥールーズでの、38人にのぼる同志の告訴を招来した。

ことの重大さは、これが、インターナショナル内部での、マルクスの指導に対する烈しい批判をひき起したことにみられる。やがてフランスにおけるマルクス主義の指導者になるジュール・ゲードも、当時亡命していたローマから、「ジュラ連合会報」へ手紙をかき、その怒りをぶっつけている。これは1873年4月15日号に載せられ、その題名は「マルクス主義独裁官」というはげしいものであった。セヴァエスはその全文を紹介しているが、その一部を引用してみよう。

「トゥールーズ裁判から生ずるものは単にマルクスとインターナショナル幹事会の代理人の恥ずべき役割にとどまらず、マルクスと幹事会がその支持者である権威主義的組織の制度そのものの告発である」。ハーグ大会で中央機関に余りに大きな権限が与えられたところにその原因がある。「それぞれの国で、労働者に、無政府的に、かれらの利害にもっとも合致するようにみずからを組織せしめよ。そうすれば、ダントレーニユのような連中はもう出ないだろう」「諸支部、諸連合の自治は、インターナショナルの精神であるだけでなく、その安全でもあるのだ」(p. 63)

インターナショナル内部でのマルクス派と、バクーニンを中心とするアナキスト派の対立を想起すれば、この手紙はゲードが当時(1873年春)バクーニンとアナキズムに近かったことを示している。無政府、自治等の用語もアナキズムのものであり、彼がマルクスの経済学に対してではないとしても、少なくともその

労働者組織や、政治的方策についての考え方に反対していたことが判る。ゲードは当時ポール・ブルースの友人でもあった。

これに対しマルクスはゲードに手心を加えず反撃し、エンゲルス、ラファエルとともにかいたバクーニン批判のパンフレットの中で、ゲードを密告者とよんでいる。

すべてこれらのできごとや論争は1872年—74年頃を支配した無秩序と混乱、分裂を証言している。ハーグ大会以後、マルクス主義とアナキズムの対立を反映して、フランスでも労働者運動は二つに分裂した。一派はバクーニンと特にそのスイス、イタリア、スペイン、フランス・ミディ、ベルギーの一部の支持者にしたがい、他の一派は、イギリス、ドイツ、合衆国の「純粹な」(とセヴァエスは表現する)マルクス派にしたかったのである。

セヴァエスは、これらのできごとや分裂が、フランスへのマルクス主義の導入を何も利するものではなかった、とこの章を結論づける。では、どのようにしてマルクス主義はフランスに浸透したのか。

#### 四

第六章。1877年、ティエールはコミューヌに対する苛烈な弾圧は、社会主義を放逐することに成功した、と信じた。だが、まさにその時に、新しい社会主義運動が起ったのである。そしてそれが1876年秋、亡命から帰国したゲードの仕事であった。

かれはすでにみたとおり、はじめマルクス主義どころではなかった。1869年以来、モンプリエで革命的急進主義の「人権」紙の編集長をしていたが、ゲードは急進主義であり、政治的であって、社会主義者ではなかったのである。コミューヌへの支持も、プロレタリア蜂起や、階級闘争のためではなく、王制復古に脅かされている共和制を救うためであった。そのため、コミューヌ支持のかどで5年の投獄をいい渡され、スイスへ亡命した。そこは、マルクス派とバクーニン派の争いのもっとも激しく、かつ混乱した所であったが、ゲードは、はじめ偶然にバクーニン派に接近した。ジュコフスキーらと「革命的社會主義の宣伝と行動のセクシオン」をつくり、1871年11月12日、ソンビリエでのジュラ連合大会でこれを代表して出席した。ジャム・ギョームらと共に、インターナショナル幹事会の独裁的権力を批判し、支部の自治を主張して、その生

来の雄弁のゆえに重要な役割を大会で果たした。彼は大会書記に任命され、幹事会批判の宣言書を起草した。当然のことながら、それはアナキスト的性格を示している。

1872年4月30日、肋膜炎のためジュネーヴから移ったローマで、ゲードは反マルクスの手紙をジュコフスキーにかいている。1873年「社会主義教理問答論」をかいたが、これは形而上学的なものであった。だが、ゲードは少しずつ、バクレーンの影響と、形而上学とから脱却していく。ゲードにそれを可能にしたものは、マルクス主義的傾向をもった闘士たちとの対話と、ロシアのチュルヌイシェフスキーの有名な「何をなすべきか」によって、コミューンの社会的・経済的性格を見ぬくようになったことによる。ゲードはこれらの道筋の中で、唯物史観や階級闘争の観念をおぼろげにつかんだ。1875年、イタリア語で「財産論」をかいた。これは1914年にはじめて仏訳されるが、そこでかれは私有財産の廃止と、集産主義的見解を公けにし、集産的所有ないし、自治体的所有を主張している。

パリに帰った時は(1876年)、ゲードは完全に、かつ決定的に社会主義者であった。だがかれはまだマルクスの著作をよんでいず、この時にはすでにフランス語に訳されていた資本論も知らない。彼がそれを知ったのはさらに15ヵ月ないし、18ヵ月の後であった。ゲードは自分の努力でマルクス主義に近づき、やがて革命的共産主義に到達することになる。帰国以来、ゲードは日刊の「人権」紙に協力していたが、紙上、パリで行われるべき労働者会議について論じた。これが、カフェ・スフレに集まるカルチュ・ラタンの革命的な若者たちの注目をひき、ゲードと関係ができるようになった。その中にはガブリエル・ドゥヴィル Gabriel Deville もいる。「人権」紙は政府の弾圧によって発行停止となり、これにかえてゲードは「平等」(L'Égalité)の刊行を決意した。これこそ、フランス最初のマルクス主義的傾向をもった機関紙であった。

そのうちにゲードは、フランス亡命中のカール・ヒルシュと知り合い、ヒルシュを通してベーヴェルヤ

W・リープクネヒトが「平等」のドイツ通信員となり、その他、ベルギー、イタリア、スペインにも通信員ができた。「こうして、フランス最初のマルクス主義新聞『平等』の追跡が重要となる。フランス・プロレタリアないし、プロレタリアのエリート<sup>(3)</sup>のマルクス主義的教育の視点から、『平等』紙がもっとも貴重な文献だからである」(p. 78)

「レガリテ」紙の第一のシリーズは1877年11月18日から1878年7月14日号まで、およそ40号を発刊したが、その民衆への教育効果はかなりのものであった。だが、それはまた権力による弾圧の対照にもなり、その支配人、エミール・ダリウはモーの裁判所へ召喚され、1年の禁固と、1,000フランの罰金を課され、当分休刊のやむなきに至った。その第2のシリーズは1880年1月20日号から8月25日号に及び、サブ・タイトルを「革命的集産主義」とした。

パリの労働階級の発展に特に注目していたマルクスは、「毎週熱心に『平等』をよんだ。いまやゲードとマルクスは文通をもつに至る」とセヴァエスは述べている。だが、その手紙は残されていないようであり、ただ一つ、〈カール・マルクス・アルヒーフ〉に残っている手紙がある。それは1934年、ドイツ社会民主党のアルヒーフ全部と共に、パリに運ばれたものである。この手紙は、ゲードと、「フランス革命」紙で協力しているコミューンの旧同志の間の軋轢を物語っている。かれらは8年前のコミューンののち、パリのプロレタリアの中に生まれた革命的社会主義への発展を、十分に理解することができないでいる。ゲードは、マルクスに、フランスのプロレタリアをブルジョア急進主義——フランス革命の子孫たる——からひきはなす必要を力説している。さらにマルクスの女婿ロンゲの「社会主義綱領」を批判し、ロンゲをブルドン主義者であるとマルクスに訴えている。この手紙には日付がないが、ネッケル病院のしるしから、かれがそこにいた1879年4月か5月のものであることがわかる。それは、パリでインターナショナル社会主義大会を組織しようとしたかどで、1878年10月24日、セーヌの裁判所で6

注(3) ゲードがなぜ「集産主義」という言葉を好んで用いたのか、という問題について、ガブリエル・ドゥヴィルは——ゲード、ラファルグとともに、はじめから POF の3指導者の1人であった——フランスで盛んであった古い共産主義の諸流派からマルクス主義を区別するためであった、と述べており、また、ドゥヴィルによれば、集産主義という言葉は、1871年頃バクレーン派をさすためにすでに用いられていたが、1876-7年頃反対にマルクス派がそれを名乗るようになったのだとセヴァエスは書いている。(74-5頁)

(4) 「平等」(L'Égalité) 紙については Michelle Perrot のすぐれた研究論文がある。Le premier journal marxiste français: L'Égalité de Jules Guesde (1877-1883), L'Actualité de l'histoire, Numéro 28, Juillet-Août-Septembre, 1959.

ヵ月の判決を受けたのちのことであった。

ゲードは出獄、退院後、実際にこの運動をはじめ、いたる所で集会を開いた。最初、トロワイ、ヴィエヌヌ、ベジエ、そしてニームで。かれのよびかけで、社会主義研究会と名の最初の社会主義のグループと委員会が結成され、のちのマルセーユ大会で重要な役割を果たすことになる。このゲードの努力は1878年以後効果をあらわした。リヨンの第2回労働者大会(1878年1月28日—2月8日)では少数派だったものが、やがて《不滅のマルセーユ大会》では多数派となる。それは1870年以來の3回目の全国労働者大会であった。第1回はパリ、第2回はリヨンで開かれたこの大会は、いずれも穏健なもので、もっとも保守的な新聞の賞讃をもうけたが、今度はちがったものとなり、「社会主義労働者大会」と銘うつこととなった。その目的は「土地、地下資源、労働用具、原料の共有」となった。

マルセーユ大会は、一切のブルジョア政党からのプロレタリアの決定的袪別を宣言し、さいごに、やがてPOF——フランス労働者党——たるべき階級政党の結成を決定した。その結果、「綱領」——最低限の綱領——の検討が必要となった。そしてそれは事実上、ゲード、マルクス、およびエンゲルスによって起草されたのである。そのいきさつは次のようなものであった。

綱領のあらすじをつくり上げたあと、ロンドンに住みついているマルクスの女婿ポール・ラファルグと少し前から文通していたゲードは彼にマルクスとの面会を依頼したと思われる。ゲードは、ブノワ・マロンとその周辺の友人と相談してからラファルグと会った。ラファルグは、マルクスとの面会に反対しなかっただけでなく、海峡を渡るようにすすめ、マルクスやエンゲルスが彼と会うことを喜ぶだろうと述べた。ゲードが1880年5月にロンドンへ渡ったのはこのようにしてである。こうしてマルクス、エンゲルス、ラファルグそしてゲードが綱領をつくることになった。マルクスは1880年11月5日付のゾルゲ宛の手紙に書いている。「ゲードは、今度の選挙にそなえて、私たちと、労働者のための選挙むけ綱領をつくり上げるべくロンドンへやってきた」(p. 100, 注)

エンゲルスによると、その前文はもっぱらマルクスの手によるものであり、その他は討議の上、修正を断念したもので、もっぱらフランス人が責任を負うべき

ものとしている。エンゲルスはここで最低賃金の要求と、相続廃止の項を指摘し、マルクスがこれを余り科学的でない、としたのに対し、ゲードが残しておくことを固執した、といっている。<sup>(5)</sup>

1880年7月18日、中部連合の地域大会でこの綱領は100対9で承認され、この大会はさらに戦闘的な序文をも併せて決議した。

「中部地区大会は、もし革命が労働者階級の唯一の解放手段であるならば、この革命は組織された労働階級とともに、そしてそれによってのみ可能であることを考慮し、

この組織の第一歩は、必然的に労働者階級のブルジョア政党からの分離であり、この分離は、政治的に諸階級の混合をつくり出した同じ投票用紙の助けを借り、選挙の領分でこそ果されねばならないことを考慮し、

さいごに、革命の最悪の敵は、でまかせにしゃべりながら、革命を可能にするようなどんな手段をもとることを拒否する連中であることを考慮して、つぎのように宣言する。

われわれは、選挙綱領を採択する、と。……」(p. 102)

革命と、労働者の組織化、そのブルジョア政党からの独立の宣言。われわれは、すでにゲード主義が陥っていくいくつかの欠点をそこに予感しつつも、フランス労働階級の高らかな政治的自立の宣言を見出すことができる。

4ヵ月ののち(11月16日—22日)、協同組合主義者や穏健派の激しい反対にもかかわらず、アールルの全国大会は、マルセーユの集産主義的決議を確認した。「かくしてそれ以來、フランス社会主義の現在の綱領に導入されたものは純粹のマルクス主義である。3年後の1884年3月29日から4月7日に、ルーベで開かれたPOFの第7回全国大会は、党とその行動のマルクス主義的性格をさらにはっきりさせ、正確にする決議をいくつか採択した。」(p. 102)

ここでゼヴァエスが引いているその決議文は、現在、我々がよむとかなり客観主義的であり、政治権力志向の性格をもち、したがってのちにサンディカリズムを生み出さざるをえないような議会主義的傾向をすでにもっているが(ゼヴァエスはゲード派らしく、それを《純粹の》マルクス主義とよんでいる)、それが、いぜんフラ

注(5) マルクスは1880年11月5日付、ゾルゲへの手紙でこの綱領を多くの留歩をつけながらも、結局のところ評価しているといえよう。「フランス労働者を空語の山から現実の大地へ降りてこさせるのは大きな一歩であった」。Claude Willard: Les Guesdistes, le mouvement socialiste en France (1893-1905), Paris, 1965, p. 18, cité.

ンス労働者のマルクス主義への発展を示していることは疑いえない。

こうしてゼヴァエスはこの章で結論する。「フランス労働階級の考える人々にマルクス社会主義の基本的諸前提を浸透させるのにもっとも貢献したのはジュール・ゲードである」と。(p. 109) ゼヴァエスはゲード

と並んで、1882年にフランスに帰り、「レガリテ」紙の第2シリーズに規則正しく協力したのも、同年サンテチェンヌとロアンヌの社会主義大会に参加することとなった、ポール・ラファルグの名をあげている。

〔未完〕

(経済学部教授)